

文化財 ニュース

26 Spring 2022

特集

常盤橋門跡の修理工事と その成果

国指定史跡常盤橋門跡は、平成 23 年（2011）に発生した東日本大震災で被災し、以来、令和 2 年（2020）までの間、千代田区が修理工事を実施してきました。今回の特集では、その修理工事によって明らかになった史跡の歩みや構造について紹介します。



枅形石垣と常盤橋の修理

千代田区大手町に所在する常盤橋門跡は、江戸城に関する史跡の中で最も早い昭和 3 年（1928）に指定された国史跡です。江戸城の外郭門は、明治以降の開発の中でほとんどが破却されており、当時としては画期的な文化財指定でした。現在では、ほぼ全域が公園として開放されており、江戸城大手門筋の外郭正門として用いられた枅形石垣と明治 10 年（1887）架橋の石橋を見学することが出来ます。

平成 23 年（2011）から千代田区が実施した修理工事では、まず枅形石垣、次いで石橋の解体修理工事を実施しました。解体やそれに伴う掘削調査では、門や石橋の構造に関わる新たな知見が得られたほか、創建当時の意匠を取り戻すことなどを目的として実施した歴史資料や地質・構造に関する資料の調査からも史跡の歩みに関する成果が挙げられました。

常盤橋門跡の歴史と歩み

現在、区内に石垣を残す江戸城外堀の門跡としては、牛込門や赤坂門、四谷門などがありますが、この中で最も当時の姿を残しているのが常盤橋門です。江戸城の東側外郭に位置する常盤橋門は、寛永6年(1629)に出羽・陸奥の大名によって築かれた枡形門です。五街道である奥州道中(日光道中)につながる江戸五口の一つで、門をくぐった先は江戸城正門・大手門へと続く「大手前」と呼ばれました。

当時の門の様子を示す史料として、「江戸城御外郭御門絵図」(享保2年(1717))があります【図1】。これを見ると、枡形石垣は横幅13間×

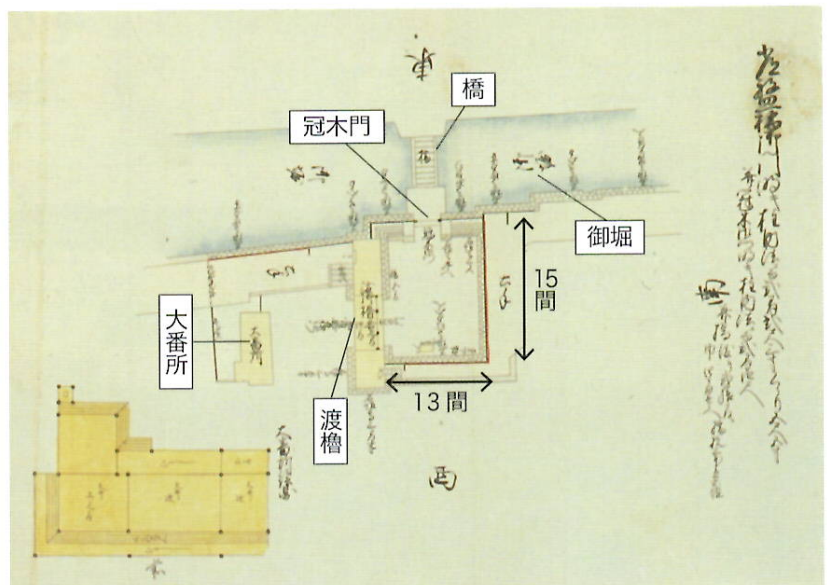
奥行15間、高さは最も高い部分で5間でした(1間は約1.8m)。当時は木橋が架かり、冠木門と渡櫓門を通過した先には番所がありました。門の警備は、『殿居囊』(天保8年(1837))によれば3万石以上の外様大名があたり、鉄砲や弓を用意して緊急時に備えました。門は江戸時代を通じて度重なる火災や地震で損傷を受けましたが、その都度再建され、枡形石垣と門の構造を維持したまま明治維新を迎えました【図2】。

明治になると常盤橋門を含む多くの江戸城諸門は撤廃され、橋も石橋に架け替えられました。当時の史料には、石垣の石材を転用することで輸送費を抑えられることや九州(旧薩摩・肥後)の石工には優秀な人材がいることが記されており⁽¹⁾、常盤橋にも小石川門の石垣廃材が再利用されたことがわかっています。なお、明治以降、石橋の常盤橋は「常磐橋」と呼ばれ始め、現在も石橋は常磐橋の漢字を使用しています⁽²⁾。

明治から昭和に至るまで、常盤橋門跡は何度も存続の危機にさらされました。しかし、市民による存置運動の成果もあり、昭和3年(1928)に国史跡に指定されました。関東大震災でも大きな被害を受けましたが、渋沢栄一を顕彰する財団法人渋沢青淵翁記念会によって復興されました。記念会は渋沢像の製作・設置と、市民公園整備のために約10万円(企業物価指数をもとに計算すると現在の金額で約6,100万円)を準備し、東京市は昭和8年に常盤橋公園を開園、翌年常磐橋を開放しました。

再開発が盛んな都心にありながら、常盤橋門跡が良好な状態で現在まで引き継がれてきた背景には、文化財を守るために力を尽くした人々の姿があります。

(学芸員 篠原 杏奈)



【図1】「江戸城御外郭御門絵図」(東京都立中央図書館特別文庫室所蔵)



【図2】『旧江戸城写真帖 常盤橋見附図』明治初期横山松三郎撮影(東京国立博物館所蔵 Image:TNM Image Archives)

- (1) 山城祐之「石橋造築之議」(上書建白書、第八十六号(明治6年(1873)4月)、国立公文書館所蔵)
- (2) 明治10年(1877)に架け替えられた石橋の親柱に「常磐橋」と刻まれたことによる。ただし、その後も史料中では「常盤橋」と記されることも多く、「盤」と「磐」は併用されたとみられる。

解体・発掘の成果

桁形石垣は、近世当初から現在までに少なくとも6回程度の修理を経ていることが記録によって明らかになっています。今回の修理工事に伴う調査では、過去の修理工事の際に、オリジナルの基底部分が失われてコンクリートの基礎の上に石垣が据えられていることや、石垣を支持する内部の構造が栗石や版築土（土や砂を薄く交互に重ねたもの）などではなく山砂に置き換わっていることが明らかになりました【写真1】。東日本大震災の際にも、こうした構造的な弱さが被害の拡大につながったものと考えられます。一方で、隅角部の石材からはチキリと呼ばれる金属製の部材で石同士を固定した痕跡などが見つかるなど、近世以来の技術や石垣の形態を尊重しながら修理が繰り返されてきたことが確認できました。

石橋の修理工事では、右岸側の橋脚内部などに近世に木橋だった当時の遺構が残されていることが明らかになりました。残されていた木橋橋脚は2列5本で、直径約43～48cmをはかる頑強な丸木杭と護岸石垣で構成されていました【写真2】。



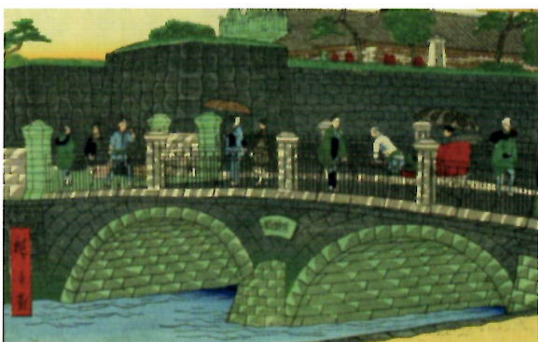
【写真1】 桁形石垣（北側）解体の様子



【写真2】 常盤橋右岸の地下遺構



↑【写真3】「常盤橋修復前」
昭和6年（1931）撮影
（東京グリーンアーカイブス
所蔵）



←【図3】「古今東京名所：
常盤橋御門不二の遠景・常
盤橋内印刷局」（部分）に
描かれた水切石
（早稲田大学図書館所蔵）

見学ガイド

今回の修理工事では、修理以前の段階では失われていた創建当時の姿を復元した箇所があります。写真3は関東大震災後の常盤橋を写したのですが、中央の橋脚に崩れている箇所があることがわかります。これは水切石とよばれる部分で、創建当時には上下流の両方に設けられていました。

復元に際しては、古写真や錦絵を参考にして図面を描き起こしました【図3】。見学に訪れた際には、見事な流線形の水切石にも是非注目してみてください。

（学芸員 相場 峻）

意外と多い！千代田区の弥生時代の遺跡

昭和33年から今日までの発掘調査成果

発見！千代田区の弥生時代の遺跡

千代田区内の発掘調査では、近世に江戸のまちがつくられる以前の生活痕跡が多数見つかっています。この内、弥生時代の生活痕跡としては、昭和33年（1958）の九段坂上貝塚【写真1】を契機として11ヶ所が報告されています。最近では、令和3年（2021）に発掘調査が実施された志摩鳥羽藩稲垣家上屋敷跡【写真2】においても、弥生時代の住居跡が4軒検出されました。現在、弥生時代の遺跡は、区内の先史時代の中で最も検出された遺構（住居跡や墓）が多い時代となっており、今回はその概況を紹介します。

地理的環境と遺跡の位置

【図1】に区内における弥生時代の遺跡の位置を示しました。河川流域ごとに遺跡を分けると以下ようになります。

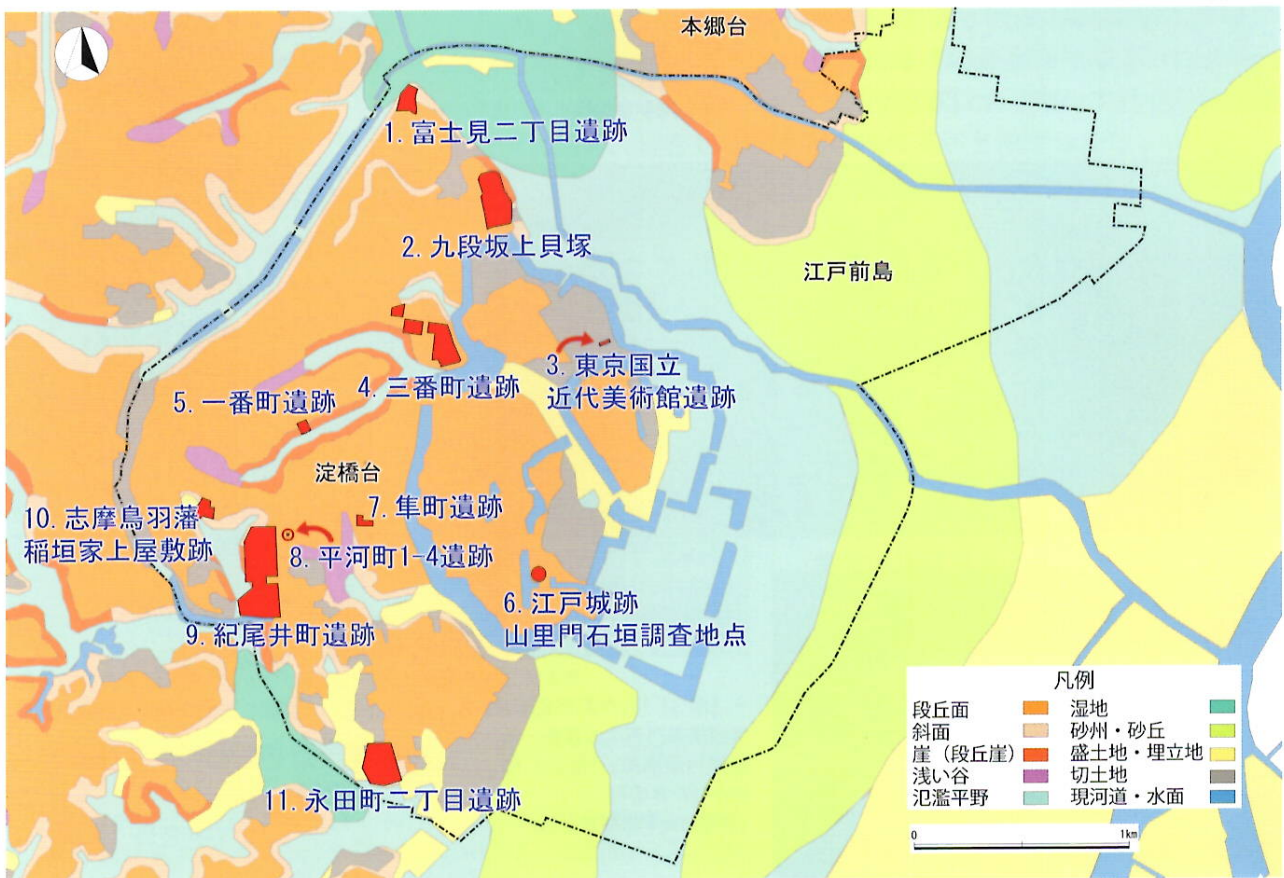
- ①旧平川流域⁽¹⁾の遺跡：6ヶ所
 富士見二丁目遺跡、九段坂上貝塚、東京国立近代美術館遺跡、三番町遺跡、一番町遺跡、江戸城跡山里門石垣調査地点



【写真1】九段坂上貝塚の住居跡



【写真2】志摩鳥羽藩稲垣家上屋敷跡の住居跡



【図1】千代田区内における弥生時代の遺構・遺物が発見された遺跡

この地図は国土地理院発行の治水地形分類図を再トレースして使用しています。

②旧汐留川流域の遺跡：5ヶ所
 隼町遺跡、平河町1-4遺跡、
 紀尾井町遺跡、志摩鳥羽藩
 稲垣家上屋敷跡、永田町二丁目
 遺跡

いまのところ弥生時代の遺構が検出された遺跡は、地形分類上でみると台地に立地しているものがほとんどです。低地では弥生時代の遺物のみが出土した事例がありますが、住居跡や水田址みずうらのような生活痕跡を示す遺構はまだ発見されていません。

検出された遺構と遺物

区内で検出された弥生時代の住居跡のほとんどは弥生時代後期に属しています。唯一、永田町二丁目遺跡が弥生時代中期に属しており、検出された住居跡から宮ノ台式土器が出土しました。

区内で検出された弥生時代の遺構と出土遺物については【表1】のようになります。区内の遺跡には九段坂上貝塚や永田町二丁目遺跡のように遺構から貝、魚骨、動物骨などが出土しており、当時の狩猟や漁労による生活痕跡が確認されています。また、一番町遺跡では弥生時代の墓である方形周溝墓けいけいしゅうこうぼが2基検出されており、土器が周溝部分から出土しています【写真3】。

今後の調査課題

区内における弥生時代の遺跡について概況をみてきましたが、意外と発見された遺跡が多いことが見られたかと思えます。区内における当該期の調査課題としては以下2点が挙げられます。1つ目は、低地における弥生時代の生活痕跡についてです。例えば、富士見二丁目遺跡は比較的幅の広い低地を望む台地に立地しており、目の前に湿地が広がっています。隣接する文京区では、この湿地で弥生時代の遺物が発見されており（小石川一丁目遺跡）、将来的に千代田区でも弥生時代の遺物や遺構が発見される可能性があります。

2つ目は、千代田区における弥生時代では、どのような植物を食べていたのか、まだ明らかになっていません。一般的に稲作をイメージさせる弥生時代ですが、区内で当該期の水田あっこんが検出された事例はまだありません。今後、区内の遺跡において土器についた種子圧痕あっこんの分析や住居跡に堆積した土から炭化した種子を検出する分析を行うなど、弥生時代の植物利用について調べていきたいと思えます。

(学芸員 濱口 皓)

(1) 旧平川は過去に淀橋台東側に流れていたと推定されている河川です。

【表1】千代田区内における弥生時代の遺跡一覧

No.	遺跡名	調査年	検出遺構	出土遺物
1	富士見二丁目遺跡	平成17年	住居跡10軒、 方形周溝墓1基	土器、石器
2	九段坂上貝塚	昭和33年	住居跡2軒、 環濠1基	土器、貝、 魚骨
3	東京国立近代美術館遺跡	昭和54年	住居跡3軒	土器
4	三番町遺跡	平成19年	住居跡2軒	土器、石器
5	一番町遺跡	平成3年	方形周溝墓2基	土器
6	江戸城跡 山里門石垣調査地点	平成20年	住居跡3軒	土器
7	隼町遺跡	平成6年	住居跡3軒	土器
8	平河町1-4遺跡	昭和63年	住居跡2軒	土器
9	紀尾井町遺跡	昭和61年	住居跡2軒	土器
10	志摩鳥羽藩 稲垣家上屋敷跡	令和3年	住居跡4軒	土器
11	永田町二丁目遺跡	平成14年	住居跡5軒、 土坑1基、 環濠1条、溝3条	土器、貝、 魚骨、動物骨、 人骨



【写真3】方形周溝墓から出土した土器

関東大震災から 100 年

大正 12 年（1923）9 月 1 日午前 11 時 58 分、東京・横浜一帯に甚大な被害を及ぼした関東大震災が発生しました。来年、令和 5 年（2023）は、関東大震災から 100 年となります。

千代田区は区内の震災と復興を伝える資料を収蔵しており、区指定文化財の中の、「旧神田区復興小学校建築関係資料」や「今川小路共同建築資料」がこれにあたります。

関東大震災は公刊された資料から、被害状況や人々がどのような行動をしたのかを知ることができます。その一方で、家族史という視点に目を向けると、そのなかにも震災記録があります。今回は、安部家歴史資料の「入京御願」を取り上げ、紹介します。

震災後の罹災者への対応

震災直前の東京市は、人口約 250 万人を抱える大都市でした。しかし、震災で約 6 万人が亡くなり、東京市の全人口のうち 70%にあたる 150 万人が被災、約 48 万世帯のうち約 35 万世帯、73%の家屋が被災・焼失しました。

政府による罹災者の救済は、インフラが破壊されたことによる都市機能の麻痺、生活物資の不足などの理由により進みませんでした。震災直後の罹災者の避難状況は、【表 1】となります。そこで、政府は罹災者を被災地域の外に避難させることにし、ピラなどと呼びかけ、9 月 3 日、鉄道や船舶での無賃輸送を決定します。しかし、鉄道は甚大な被害を受けており、急ピッチで復旧工事が行われ、多くの罹災者を運びました。

【表 1】罹災者の避難状況

避難場所	人数
上野公園	50万人
宮城前広場	30万人
浅草観音境内	7万人
芝公園	5万人
九段靖国神社境内	5万人
洲崎埋立地	5万人
明治神宮外苑	3万人
深川清住公園	5千人
計	105万5千人

出典：『大正大震災志』（上）、393-394頁をもとに作成

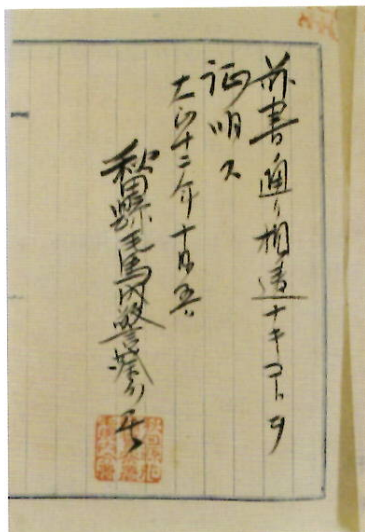
安部家の震災記録

それでは、「入京御願」を見ていきましょう。この史料は震災から約 1 カ月後に安倍真造とその家族が東京に入る許可を避難先の警察分署長に願い出たものです。当時、一般に使用されていた原稿用紙を 2 つ折りにしたものを、2 枚綴り、3 頁構成となっています。

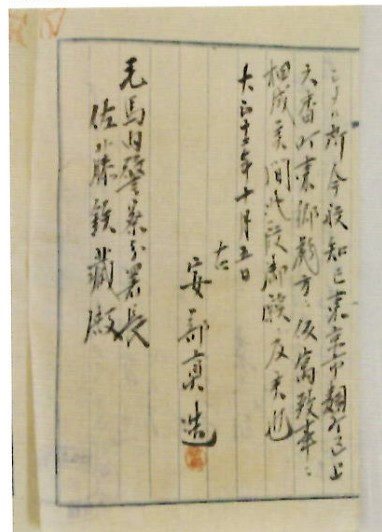
1 頁目には安倍真造（46 才）、ヒサ（31 才）、喜久雄（9 才）の名前があり、住所は麹町区三番町四十六番地（現千代田区三番町）となっています。安部家について、区所蔵の学校資料「大正十一年以降除籍児童学籍簿 上六小学校」を見ると、喜久雄が上六小学校（現九段小学校）に入学し、その後、番町小学校に転校した記録があり、その学籍簿には父真造の職業が会社員と記されています。

【史料】

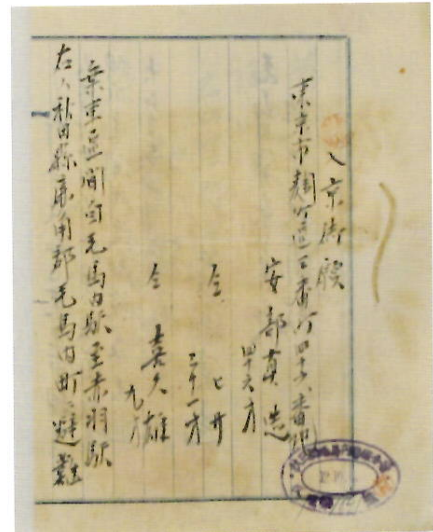
3 頁目



2 頁目



1 頁目





震災後、彼ら3人がいつ東京を離れたのかは不明ですが、麴町区は約70%の家屋が被災し、安部家の自宅も焼失してしまいます。安部家の人々はヒサの実家がある秋田県鹿角郡毛馬内町（現秋田県鹿角市十和田毛馬内）に避難し、10月5日に東京に戻るため毛馬内駅から赤羽駅までの乗車許可を求めます。

当時の鉄道復旧の状況を見ると、秋田へは東北本線を利用しますが、出発点となる上野駅が焼失したために田端駅から汽車が出ていました。『大正震災記』（1923）には田端駅に人々が殺到した様子として、「押し倒す、突き飛ばす、刎ねかへす。悲鳴、怒號、一大叫喚、忍ち何十人と云ふ怪我人が出来る。」と記されています。

3頁目には同日付けの分署長佐藤鉄蔵の証明書がついています。安部家の人々が東京にどのように戻ったのかは不明ですが、赤羽駅が東京に入るための入口となっていたのではないかと思います。

【史料】 3頁目
(翻刻)

前書通り相違ナキコトヲ
証明ス
大正十二年十月五日
秋田県毛馬内警察分署 印

2頁目

シタル所今般知己東京市麴町区上
六番町東郷彪方二仮寓致事二
相成候間此段御願二及候也
大正十二年十月五日
右
安部真造 印
毛馬内警察分署長
佐藤鉄蔵殿

1頁目

印 入京御願
東京市麴町区三番町四十六番地 印
安部 真造
四十六才
全 ヒサ
三十一才
全 喜久雄
九才
乗車区間自毛馬内駅至赤羽駅
右八秋田県鹿角郡毛馬内町二避難

他に注目する点として、2頁目の1～2行に「麴町区上六番町東郷彪方二仮寓」とあり、安部家の人々が仮住まいしたのが、麴町区上六番町（現千代田区三番町）に住んでいた東郷平八郎（1848～1934）の家だったということです【写真1】。そして、約3カ月の間、東郷邸に住み、その間に自宅跡地にバラックを建てました。真造は平八郎の息子彪と震災前からの知り合いで、家同士で付き合いがありました。昭和9年（1934）に東郷平八郎が死去すると、真造は『東郷元帥直話集』（1935）を刊行し、平八郎の息子彪がその序文を寄せています。

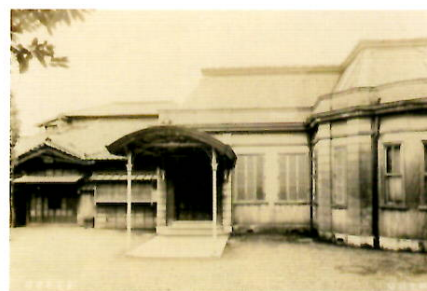
自宅を失った罹災者の多くはバラックなどに居住しますが、安部家は焼失しなかった邸宅に仮住まいすることで被災地に入ることを許可され、早い段階で戻って来られたのかもかもしれません。

震災の記録

被災地の混乱が収束に向かい、9月30日に無賃輸送は終了します。しかし、入京制限は10月初めの時点でも継続されていました。地方に一時避難した罹災者が被災地に戻ってくる条件に住む場所が必須であったことは確かです。今回紹介した史料は、罹災者が被災地に戻るのにも許可が必要であったことを伝えてくれています。

安部家歴史資料には、他にも関東大震災関連の絵葉書や写真、自宅を再建するための書類や設計図などの資料もあります。震災に関して公刊された資料だけでなく、家族史の中の震災の記録にも注目し、今後も調査していきたいと思います。

(学芸員 白井拓朗)



【写真1】昭和初期の東郷邸（千代田区所蔵）

(参考文献)

- ・長井修吉編『大正震災記』（大正震災記録編集委員会、1923年）
- ・内務省社会局『大正大震災志』（岩波書店、1926年）
- ・北原糸子『関東大震災の社会史』（朝日新聞出版、2011年）

令和4年度年間スケジュール（予定）

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
企画展										21(土)	19(日)		
										企画展 竹下夢二展（仮）			
常設展	通年												
	総合テーマ 江戸・東京の成立と展開						18(火)						19(日)
						テーマ展 千代田区のレンガ建築（仮）							

文化財講座

講座名	テーマ	開催時期
ちよだの歴史と文化の講座	常盤橋門跡 復興と継承の400年（仮）	11月頃
地域の歴史を知る講座	発掘された神田猿樂町一丁目遺跡の旗本屋敷（仮）	7月9日（土）
講座名	内容	開催時期
江戸城外堀ウォーク	国史跡江戸城外堀跡を歩きながら、歴史を学びます。	5月21日（土）
江戸城登城ウォーク	国特別史跡江戸城跡を歩きながら、歴史を学びます。	11月3日（木・祝）
講座名	内容	開催時期
手描提灯をつくる	提灯や昔の灯火具について学び、提灯の絵入れを体験します。	8月頃
はじめての蒔絵	漆工芸技術の1つである蒔絵を体験します。	3月頃

※日程の詳細については、別途お問い合わせください。
 ※コロナウイルスの影響により、中止になることもあります。



都営地下鉄 ●三田線「内幸町駅」徒歩3分
 東京メトロ ●千代田線
 ●日比谷線 } 「霞ヶ関駅」徒歩5分
 ●丸の内線

駐車場 当施設に駐車場はありません。

開館時間 月～金 10時～22時
 土 10時～19時
 日・祝 10時～17時
 文化財事務局 月～金 10時～18時

※企画展・特別展の観覧時間は異なる場合があります。
 ※緊急事態宣言が解除されるまで、平日の開館時間は10時～20時までとなります。
 最新情報はホームページ等でご確認ください。

休館日 毎月第3月曜日

文化財ニュース 第26号 (3,000部)

発行日 令和4年3月25日

編集・発行 千代田区立日比谷図書文化館 文化財事務局
 〒100-0012 東京都千代田区日比谷公園1-4
 TEL: 03-3502-3348 FAX: 03-3502-3361
 HP: <http://edo-chiyoda.jp>
 e-mail: bunkashinkou@city.chiyoda.lg.jp

印刷 日本印刷株式会社